

ヘミングウェイ作品の“Now I Lay Me”における
作家としてのニック・アダムズ
ーニックの眠りとトラウマー

**Nick Adams as Writer in Hemingway's "Now I Lay Me":
Nick's Sleep and Trauma**

坂田 雅和

SAKATA Masakazu

Abstract: This study aims to analyse Nick Adams's wilful insomnia following a bomb attack in Italy and reflect on the meaning of using the present tense in Hemingway's short story 'Now I Lay Me', written in 1927. He lies on the floor and listens to silkworms eating while experiencing a strange feeling. In this story, Ernest Hemingway uses a complex pattern of past tense and past perfect tense. However, interestingly, he uses the present tense ten times. The story is divided into five parts, with ten paragraphs portraying Nick's memories. Several crucial elements of this story have been outlined by critics in attempting to divide and organise it. The ten occasions wherein the present tense is used indicate the difference between the Nick who is recalling his memories and the Nick who is narrating in 1927. The distinction among the five parts along these lines is obvious. If we consider four of Hemingway's Nick Adams stories and arrange them chronologically, we obtain the following list: 'Big Two-Hearted River', 'In Another Country', 'Now I Lay Me' and 'A Way You'll Never Be'. The last story is in fact the first of the four from the perspective of Nick's trauma. In 'Big Two-Hearted River', the narrator tells us that Nick 'was sleepy, he felt sleep coming and he curled up under the blanket and went to sleep'. Thus, Hemingway shows us that Nick has been able to overcome his trauma.

Key words: Nick Adams, 'Now I Lay Me', Ernest Hemingway, 'A Way You'll Never Be', 'Big Two-Hearted River', 'In Another Country', trauma, sleep

アーネスト・ヘミングウェイ、ニック・アダムズ、トラウマ、身を横たえて、二つの心臓の大きな川、異国にて、誰も知らない

序論

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) は、短編小説「大きな二つの心臓のある川」(“Big Two-Hearted River”1925)の主人公ニック (Nick) が、“He, Nick wanted to write about country so it would be there like Cezanne had done it in painting.” (*Ernest Hemingway On writing* 37) と作家であること、そしてセザンヌ (Cezanne) に傾倒していることを告白している。また、チャールズ・プア (Charles Poore) へ宛てた手紙の中でも、“it is a story about a boy who has come back from the war. The war never mentioned though as far as I can remember.” (*Letters* 798) と語っていることから、この短編は戦争から帰還した兵士の物語であることがわかる。初めてこの物語を読む読者は、ニックの一泊二日の釣りのキャンプと理解し、物語に書かれていない事象に気づくことはないかもしれない。ディーン・ガス (Dean Gauss) と F・スコット・フィッツジェラルド (Francis Scott Key Fitzgerald)、そしてヘミングウェイの正式な会談が 1925 年に行われた際、その場で友人の二人は、“having written a story in which nothing happened.” (*The Writer as Artist* 125) と半分は冗談で、半分は本気で語った。大森昭生はこの作品について、「これまで本作品の表面化に隠されたものを掘り起こす作業がなされ、その多くは、ニックが戦争で肉体的、精神的に傷を負っており、この旅が治癒の旅であること前提としている」(『ヘミングウェイ大事典』101) と指摘している。作者ヘミングウェイは長編『午後の死』(*Death in the Afternoon*, 1932) で、「氷山の理論」(省略の理論) について語っている (*DIA* 192) ¹。ウィリアム・アデア (William Adair) は、「大きな二つの心臓のある川」が、“Nick’s twenty-four hours in Upper Michigan is a fictional overlay of his twelve months at war.” (145) であると明かしている。ヘミングウェイは「大きな二つの心臓のある川」の後、「異国にて」(“In Another Country”1927)、「身を横たえて」(“Now I Lay Me”1927)、そして、「誰も知らない」(“A Way You’ll Never Be”1933) という兵士の物語を書いている。島村法夫はこれら三つの作品と「大きな二つの心臓のある川」についての関係性を次のように詳細に分析している。

「実は、本作品「大きな二つの心臓のある川」は被弾の恐怖に苛まれるヘミングウェイの癒しの最終段階を描いたもので、それは「大きな二つの心臓のある川」と「身を横たえて」を経て、つまりはニックの人生の時系列とは逆の帰還兵の物語から、被弾の後遺症を回想する兵士の物語、そして肉体的損傷が癒えたかに見える最前線と再訪する元負傷兵へ移行し、徐々に被弾の瞬間に迫る複雑な手順を経て行われたと考えられる。」(『大事典』123)

本稿はヘミングウェイの短編「身を横たえて」を中心に、第一次世界大戦のイタリアで重傷を負った主人公ニックが、その時に受けた爆撃で生死をさまよい、幸いにも一命を取り留めた後、「死」への恐怖にとりつかれた中で、過去形と過去完了形が、共に現れる現在形と重なり合

う時、どのような効果が生まれ、語り手ヘミングウェイが語らなかったことを弁明し、語られた世界が意味することを解き明かすを試みるものである。

本論

タイトルである“Now I Lay Me”は、子供が寝る時に唱える祈りの言葉で、アメリカの読本である『New England Primer』(1737)の中の一節である。この作品を俯瞰して読むとき、10個の回想のパラグラフに区切られていることが、まずわかる。それらのパラグラフの回想の場所により、さらにまとまった「記憶の塊」に割り振ることができる。「記憶の塊」の割り振り方には、先行論文で論ぜられているとおり、幾つかの方向性がある。武藤脩二は次のように分析している。

「Sometime...」で始まる幾つかの文章は、場合・場所の違いによって記憶が整理されていることを示している。・・・「私」の頭は整理整頓されている、というよりは整理整頓されていなければならなかったのである。まさしく「非常に注意深く」整理整頓されているのだ(『英語青年』 297・・・は筆者)

ジェイムズ・フェラン (James Phelan) は、“Apparently not yet ready to return to what happened “that night,” Nick offers his recollections of two different kinds of memories: of fishing and of his parents.” (53) と、釣りの記憶と両親の記憶という二つの異なった記憶の割り振りが存在することを示している。また、ミリアム・マーティン・クラーク (Miriam Marty Clark) は、Nick が戦争のトラウマにより、死の考えと暗闇が示す神聖な謎の感覚という二つの割り振りをしている (173)。さらに、島村は次のように分析している。「この物語が、そのほぼ中間で、「その年の夏のその夜」に想起されたそれ以前の記憶、つまり眠らないように意識を研ぎ澄まして辿った数多くの夜の記憶と、「今」から回顧された「その年の夏のその夜」の記憶、つまり眠れなかった「私」が「私」の当番兵のジョンと交わした会話の記憶とに分割されていることである」(『ヘミングウェイを横断する』64)。つまり、この10ページ余りの作品を子細に分析すると、方法は異なるが幾つかに割り振ることができることを示唆している。その割り振りを本稿では「記憶の塊」と呼ぶことにする。その「記憶の塊」は、本作品を、複雑な流れを示す時間の流れの中で、現れる現在形をサインポストとして、回想する時間・内容・場所で割り振るものである。ただし、現在形は「記憶の塊」の中の会話にも現れるが、それらは「記憶の塊」の中の時間帯であるためここでは分析の対象にはならないので省く。「記憶の塊」は5つに割り振ることができる。それら5つの「記憶の塊」の割り振りの区切れを示すサインポストは、“am”(144, 148)、“remember”(146)、“think”(146)、“are”(146)、“know”(146, 153)、“remember”(147)、“do not remember”(148)、“can hear”(148)という10個の現在形である。それらの現在形が、「誰も知らない」で被弾した兵士の精神状態が、「身を横たえて」で語られる「死」

への恐怖にとりつかれたニックの奇妙な感覚を通して、「大きな二つの心臓のある川」で語られる「眠り」を明らかにする。

一つ目の「記憶の塊」は、作品の冒頭“*That night*” (144) で始まり、“*to make the experiment.*”

(144) で区切られ、蚕室での回想が一人称で書かれている第 1 パラグラフである。ニックは被弾したことによって起きた、逃れられない「死」への恐怖の精神構造を、次のように語っている。

“*I had been living for a long time with the knowledge that if I ever shut my eyes in the dark and let myself go, my soul would go out of my body.*” (144 emphasis mine) 文中に位置

する“*knowledge*”の語義からも明らかのように、ニックはその被弾の経験後に起きた、暗闇の中で目を閉じて意識が薄れてゆくとき魂が体から遊離する経験が、空想や思い込みの感覚ではなく、明白な事実であると語っている。

ニックのこの一見幽体離脱のようにも取れる表現から、被弾したことが原因で不眠症 (*insomnia*) になったと解釈するリチャード・B・ハーヴィ

(Richard B. Hovey) は、“*The first half of the narrative is taken up with Nick’s insomniac ruminations.*” (181) と結論づけている。

しかし、フェランはニックが、“*I myself did not want to sleep.*” (144) と語っていることから、“*He does not have insomnia but fear.*” (52) と指摘する。

不眠症のように眠ろうと努力して眠れないのではなく、意識的に眠ろうとしていないと論じているのだ。フェランのいう“*fear*”の示すこと、そしてニックが、“*If I could have a light I was not afraid to sleep, because I knew my soul would only go out of me if it were dark.*”

(148 emphasis mine) と語る中で“*afraid to sleep*”の意味することは、暗闇で目を閉じて意識が薄れてゆくとき魂が身体から離れてゆくということを恐れているわけであって不眠症ではない。

さらにニックが、“*If I could have a light I was not afraid to sleep, because I knew my soul would only go out of me if it were dark.*” (148 emphasis mine) と語るように、*light* があれば恐れることなく安心して眠ることができたのである。

一つ目の「記憶の塊」の最後に現在形が現れる。“*So while now I am fairly sure that it would not really have gone out, yet then, that summer, I was unwilling to make the experience.*” (144 emphasis mine) この突然の“*am*”

という現在形の出現は、この“*am*”が物語の状況をニックと時間的に共有することにより、蚕室で被弾が起因する奇妙な現象の起こる過去の記憶を回想しているニックと、作品の中の時間の流れを、最も深い過去から過去へ、そして一気に現在へと引き戻す効果を合わせ持つ、「現在の語り手」のニックの存在を明示している。

その現在とはこの作品の時間の流れの中心軸であるその年の夏のその夜ではなく、まぎれもなくこの作品を執筆していた時 (1927年) なのだ。スコット・マクドナルド (Scott MacDonald) は、二人のニックの対比を次のように分析している。

“*The most important aspect of the narrative perspective of “Now I Lay Me” involves the careful distinction between the “Nick” who convalesced in Italy and the “Nick” who narrates the story.*” (214)

二つ目の「記憶の塊」は、“*I had different ways*” (144) で始まり、“*and use him for bait.*” (145) で区切られる第 2 パラグラフと、“*Sometimes I found insects*” (145) で始まり、“*about*

the hook.” (145) で区切られる第 3 パラグラフ、そして、“Sometimes the stream ran” (145) で始まり、“to get to them.” (146) で区切られる第 4 パラグラフで構成される回想である。この「記憶の塊」は、幼いころとても楽しかった川での鱒釣りの情景である。その情景は、「大きな二つの心臓のある川」で語られる鱒釣りとは重なる²。この「記憶の塊」を構成する第 4 パラグラフにも現在形が現れる。“Some of those streams I still remember and think that I have finished in them, and they are confused with streams I really know.” (146 emphasis mine) この現在形は、楽しい鱒釣りだが空想の川で釣りを回想しているニックすると、実際の川を知る「現在の語り手」のニックが存在していることを明らかにしている。

三つ目の「記憶の塊」は、“But some nights” (146) で始まり、“in the daylight.” (146) で区切られる第 5 パラグラフと、“On those nights” (146) で始まり、“pray for them.” (147) で区切られる第 6 パラグラフで構成されている。

四つ目の「記憶の塊」は、“About the new house” (147) で始まり、“I would pray for them both.” (148) で区切られる第 7 パラグラフと、“Some nights, though,” (148) で始まり、“and listened to them.” (148) で区切られる第 8 パラグラフで構成されている。これら三つ目と四つ目の「記憶の塊」は共に物語の最も深い過去の記憶の回想である。三つ目の「記憶の塊」は、ニックの生家の屋根裏部屋の状況が語られ、そこにある両親のウェディングケーキの入ったスズ製の箱と、父の少年時代のアルコール液に漬けられた蛇などの標本の回想である。祖父の死後、母が設計して建てた新しい家に引っ越すわけだが、母の持っているいはいけないものという判断で、父の少年時代のアルコール液に漬けられた蛇の標本が焼かれてしまう。三つ目の「記憶の塊」でも現在形が現れる。“I remember those jars from the attic being thrown in the fire, and how they popped in the heat and the fire flamed up from the alcohol.” (147 emphasis mine) と、“I remember the snakes burning in the fire in the back yard.” (147 emphasis mine) である。これらの現在形の出現は、火の中に標本を投げられ、アルコールで燃えあがり、蛇も焼かれてしまったという好ましくない最も深い過去の嫌な記憶を回想するニックと、2 度の“remember”の出現で強調される衝撃的な事実を記憶している「現在の語り手」のニックの存在を明らかにしている。四つ目の「記憶の塊」は、整理好きな母が、父が狩猟に行っている間、父が大切にしていた石斧の数々、何本かの石の皮はぎナイフ、鎌を作るための道具類、陶器の破片の数々、そして、たくさんの鎌を焼いていたという記憶の回想である。「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp”1924) や「医者と医者妻」(“The Doctor and the Doctor’s Wife”1924) で描かれているニックの父と、インディアンの関係からもわかるように、狩猟に関する父のコレクションの数々が、父が関係のあったインディアンから譲り受けたものであると推測される。その品々を母によって焼かれるのを見ていたという好ましくない記憶が語られる。この四つ目の「記憶の塊」にも現在形が現れる。

“And I do not remember a night on which you could not hear things. If I could

have a light I was not afraid to sleep, because I knew my soul would only go out of me if it were dark. So, of course, many nights I was where I could have a light And I am sure many times, too, that I slept without knowing it—but I never slept knowing it, and on this night I listened to the silkworms.”You can hear silkworms eating very clearly in the night and I lay with my eyes open and listened to them.”
(148 emphasis mine) である。

この四つ目の「記憶の塊」の回想の時間軸と、一つ目の「記憶の塊」の回想の時間軸がここで合流する。これらの現在形は、暗闇の蚕室で蚕が静かに繰り返し桑の葉を食べている音に耳を傾け眠るまいと神経を集中しながら回想するニックと、戦争中は始終爆撃の音が絶え間なく聞えていて静かな夜などはなかったと語り、魂が抜けだすのは暗闇の時だからということを知り、light があれば眠ることができたと再び告白している「現在の語り手」のニックの存在を明らかにしているのである。

五つ目となる最後の「記憶の塊」は、“There was only one other person” (148) で始まり、“I hope you sleep, Signor Tanente.” (152) で区切られる第9パラグラフと“I heard him roll in his blankets”で始まり、“it would fix up everything.”で区切られる第10パラグラフである。この「記憶の塊」では、結婚がすべてを救ってくれると信じている3人の娘を持つ妻帯者のイタリア人兵士ジョンと、ニックの会話が大半を占める。ここでも現在形が現れる。“He came to the hospital in Milan to see me several months after and was very disappointed that I had not yet married, and I know he would feel very badly if he knew that ,so far, I have never married.” (153 emphasis mine) この現在形は、蚕室での会話の記憶を回想するニックと、未だ結婚していない「現在の語り手」のニックが存在することを示している。

結論

ヘミングウェイ本人がニューヨークでリリアン・ロス (Lilian Ross) に戦闘で受けた傷と「身を横たえて」について、「覚えているが、第一次世界大戦ってじつに恐ろしくてな、だから10年間それについては書けなかった。作家だと、戦闘で受けた傷は治るのに手間がかかるもんなんだ。そのことは昔三つの小説で書いたよー「異国にて」と「人こそ知らね」（「誰も知らない」と「身を横たえて」とに）（『パパがニューヨークにやってきた』49 カッコは筆者）と語っている。「大きな二つの心臓のある川」を含めた4作品を時系列でみると、「大きな二つの心臓のある川」（1925）、「異国にて」（1927）、「身を横たえて」（1927）、そして「誰も知らない」（1933）の順になる。これら4つの作品はニックの人生の時系列とは逆の時系列で書かれている（島村）。4作品の起点の作品は、ニックが被弾したことから始まる「誰も知らない」である。「誰も知らない」と「身を横たえて」に現れる現在形が過去形と過去完了形に重なり合う時、この現在形こそがまさしくニックの眠りが治癒したことを明示しているのである。ある晩砲弾

に吹っ飛ばされ、魂が身体から抜け出して、いったん遠くに漂ってから戻ってきたのを感じて以来、暗闇の中で目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が身体から遊離してしまうために眠りたくなる。しかし light (光) があれば恐れることなく安心して眠ることができる。「誰も知らない」の被弾直後に、ニックは次のように述べる。“I might just lie down,” Nick said. Nick lay on the bunk.” (160) さらに、三人称で“and why would he wake, soaking wet, more frightened than he had ever been in a bombardment, because of a house and a long stable and a canal?”

(162 emphasis mine) と語られ、再び 1 人称と現在形で、“I can't sleep without a light of some sort.” (162 emphasis mine) と語られている。この三人称と、現在形で語られる効果は、「身を横たえて」で現在形を考察したように、「現在の語り手」のニックの存在を明らかにしていることに他ならない。「大きな二つの心臓のある川」では、“He looked up at the sky, through the branches, and then shut his eyes. He opened them and looked up again. There was a wind high up in the branches. He shut his eyes again and went to sleep.” (182 emphasis mine) と語られているように、昼間の明るい日差しの中で昼寝をするニックがいる。そして、“The mosquito made a satisfactory hiss in the flame. The match went out. Nick lay down again under the blankets. He turned on his side and shut his eyes. He was sleepy. He felt sleep coming. He curled up under the blanket and went to sleep.” (187 emphasis mine) とあるように、夜テントの中で、マッチで蚊を殺した後にその火を消して眠りに落ちるニックがいる。つまり、蚊を火で殺してから眠りに入ることから「記憶の塊」の中に暗喩されている「死」への恐怖からも解放されたのである。

作品の中の過去形と過去完了形が、そこに現れる現在形と重なり合うとき、ニックの人生の時系列の逆に書かれた起点の作品「誰も知らない」から、帰還した兵の物語「大きな二つの心臓のある川」で、ニックは夜に明かりがなくとも眠ることができたことを作者ヘミングウェイは明かしているのだ。つまり、「身を横たえて」で弁明した 5 つの「記憶の塊」の中に現れる現在形が、精神の傷が治癒した「現在の語り手」ニックがいることを証明しているのだ。何もおきない戦争から帰還した兵の物語「大きな二つの心臓のある川」でニックの精神の傷は癒されていたと解釈できるのである。

注

(1) 長編『午後の死』(*Death in the Afternoon*, 1932) に、“If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the reader” (192) という、いわゆる「氷山の理論」という考え方が示されている。

(2) 釣りの場面では、ニックは、糸と竿の緊張感を通して鱒と一体となりながら、その命を感じ、心を動かされる。このようにニックが自然を感じて、内面に取り込んでゆく様子は、戦争の影と不変の自然が対置されているが故に、ニックの治癒を期待させる。(『大事典』101)

Works Cited

- Adair, William. “Landscapes of the Mind: ‘Big Two-Hearted River’” *College Literature* Vol. 4, No. 2 (Spring, 1977), 144-151. Print.
- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer as Artist*. 1952. Princeton: Princeton UP, 1980. Print.
- Clark, Miriam Marty. Hemingway’s Early Illness Narratives and the Lyric Dimensions of “Now I Lay Me”: *NARRATIVE*, Vol. 12, No.2 (May 2004), 167-177. The Ohio State University. Print.
- Ford, Paul Leicester. “The New-England Primer” New York: Printed for Dodd, Mead and co., 1897. <<https://archive.org/details/newenglandprimer00ford>>. Web. 21 Aug. 2016.
- Hovey, Richard B. “Hemingway’s ‘Now I Lay Me’: A Psychological Interpretation,” *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Duke UP, 1975. Print.
- Hemingway, Ernest. *Death in the Afternoon*. 1932. New York: Scribner’s, 2003. Print.
- . *Ernest Hemingway On Writing* Ed. Larry W. Phillips. New York: Charles Scribner’s Sons, 1984. Print.
- . *Ernest Hemingway Selected Letters 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner’s, 1981. Print.
- . *The Nick Adams Stories* Ed. Philip Young. New York: Charles Scribner’s Sons, 1972. Print.
- Phelan, James. “‘Now I Lay Me’: Nick’s Strange Monologue, Hemingway’s Powerful Lyric, and the Reader’s Disconcerting Experience.” *New Essays on Hemingway’s Short Fiction*. Ed. Paul Smith. Cambridge, Cambridge UP, 1998. 47-72. Print.
- 今村楯夫、島村法夫編『ヘミングウェイ大事典』(勉誠出版、2011年)。
- 島村法夫「ヘミングウェイと戦傷という病—精神的外傷と癒しのメカニズム」、『ヘミングウェイを横断する：テキストの変貌』日本ヘミングウェイ協会編(本の友社、1999年) 55-70頁。
- 武藤脩二「“Now I Lay Me”過去のre(-)collectionの物語」、『英語青年』、(研究社、1999年) 第145巻、第5号、297頁。
- ロス、リリアン『パパがニューヨークにやってきた』青山南訳(マガジンハウス、1992年) 49頁。

(2017年4月受領)